



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第108号

2020年11月1日

”新しい生活様式”は自然を軸に構築を！

..... 感染対策に留意しながら少しずつ活動を再開

感染拡大が少し落ち着いた6月に例年とは全く違った形で総会を開催してから4ヶ月、社叢学会の活動もこの会報の発行だけという寂しい状況が続いてきたが、ようやく手探りをしながらではあるが、10月25日・26日の中部定例研究会を皮切りに定例研究会を開催、関東での社叢見守り隊も再開することとなった。

人間が自粛生活を強いられる一方で、自然がそのような状況を付度するわけもなく、相変わらず自然災害が続き、そのたびにご神木や古木

が倒れたなどとニュースが飛び込んできて、社叢管理の必要性を改めて感じさせる。4面に紹介した玉川上水の問題も、適正な管理がなされておれば、起きなかったのではないだろうか。

自然環境の保護こそが次代を担う新産業を創出するという考え方も少しずつ広まりつつある。”新しい生活様式”が求められる今こそ、自然を軸とした生き方を模索する必要があるだろう。当学会でも、地道に森の声に耳を傾けながら、こうした思いを広めていきたい。

次回予告【第88回関西定例研究会】

- ◆日 時：11月28日(土) 10:00~14:00
- ◆集合場所：奈良交通バス停「春日大社本殿」
(近鉄奈良駅から8分 JR奈良駅から13分)
- ◆テ マ：春日山原始林観察会
- ◆同 行：前迫 ゆり(社叢学会理事・大阪産業大学教授)
渡辺 弘之(社叢学会副理事長・京都大学名誉教授)

- ※ 新型コロナウイルス感染症の状況によっては中止もあり得ます。また、参加者・参加人数を確定するために、必ず事前にお申し込みください
- ※ マスクの着用、手指の消毒など、参加者各自でご留意ください。なお、昼食は時間を見計らって取りますので、弁当などご持参ください。

原稿募集中！

「鎮守の森の活動報告」(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題など)や各地の「社叢訪問記」(各1,200字程度)の投稿締め切りは12月25日(火)必着です。

お気軽にご投稿ください！

* 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい

前号から、賛助会員神社の社叢を紹介しているが、今回は、理事長が宮司として奉職する秩父神社を取り上げる。本来ならば今年の年次総会を開催し、会員各位には柞の森を存分に体感していただく予定だったが、已む無く延期、目下、心おきなく拝観できる時期を待っているところである。そこで、予習も兼ねて、2018年9月の社叢見守り隊で調査した木村甫理事に執筆いただいた。

また、3面には当学会創設当初に藺田稔副理事長(当時)が話題提供した関東定例研究会の記録を再録する。

賛助会員神社の社叢

秩父神社



柞の森

秩父神社

「国造本紀」には崇神天皇の時代に知知夫彦命が初代国造に任命され、大神を祀ったことに始まるとある。12月の例大祭は秩父夜祭として有名。

所在地：秩父市伏馬場町1-1

祭神：八意思兼命・知知夫彦命・天之御中主神・秩父宮雍仁親王

秩父地方の文化圏の中心、大宮郷にあり、秩父人の精神的依り代である。秩父市街地の中心にあるため住宅や商店に囲まれ、道路で飛び地もできてはいるが、本殿の後ろには「柞の森(ははそのもり)」があり静寂が保たれている。

武蔵国に先立つ約1世紀前の崇神天皇の時代の知知夫国に、祭神として八意思兼命(やごころおもいかねのみこと)と知知夫彦命(ちちぶひこのみこと)を祀ったのだらうと「國造本紀」からみてとれる。しかし、中世から秩父平氏などに支えられた妙見社が隆盛していく。徳川家康から加増され本殿の造営が行われて現在文化財となっている。明治になって旧号秩父神社に復し、妙見大菩薩は天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)として配祀された。中世以来、妙見信仰の中心として土着の武士団からは守護神として、庶民からは憑きもの落としや養蚕の神として尊崇されてきた。祭祀行事は主に4月4日の祈年祭(椋神社からひきついた田植え神事)、7月20日の川瀬祭(悪疫や罪穢れを払う行事で神輿洗いの神事がある)、12月3日には国指定重要無形民俗文化財の例大祭(「秩父の夜祭り」といい、大きな屋台や笠鉾が曳行される)がある。例大祭の時期はかつて大宮郷の絹大市の時期でもあったのである。〔埼玉神社庁1986〕

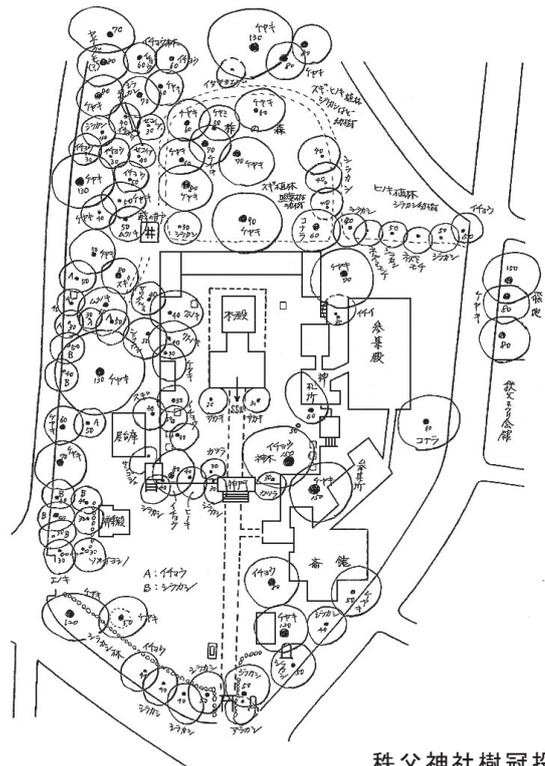
埼玉県は関東地方の中央部に位置し、西部には秩父山地があり、そこを源流とする荒川が中央部を流れて東京湾に至っている。ほぼ中央を南北に走る八王子-高崎構造線で西の山地と東の平野に分けられ、山地の地形は複雑で、尾根や谷が入り組み、所々に石灰岩の露頭もある。山地は大部分が秩父中・古生層であるが、秩父盆地は第三紀層等である。また気候帯は西より亜寒帯・冷温帯・中間温帯・暖温帯となっており、亜寒帯は秩父山地(旧大滝村等)、冷温帯は主に秩父市(旧大滝村の一部、旧吉田町等)小鹿野町等であり、中間温帯は秩父盆地周辺及び皆野町、長瀬町と東秩父村、ときかわ町、越生町の一部にかかっている。この関東西北部山地(内陸部山地)の中間温帯には多々意見があるがここでは存在するとして進めたい。その他の地域は暖温帯となっている。

〔埼玉県史1986〕〔永野1990〕

秩父神社の鎮守の森の植生を、新編埼玉県史別冊3 IV「埼玉の風土と森林」の項の森林区分を参考にして検討してみると、中間温帯林の極相林における各森林区分には当てはまらないと思われる。

秩父神社には禁足地的に守られている神域があり、昔から「柞の森」と言われていたという。現在はケヤキの大径木が優占種の森になっている。ハハソとはコナラの古語〔牧野2000〕と思われるが、またナラ類の総称とも言われていて万葉集の歌などにも登場している。中間温帯林の二次林におけるコナラ-ヤマツツジ林に該当していたと推測する。

この林分は中間温帯林の中で最も広範囲に分布していて河岸段丘などに発達し、昔から農用林として欠かせない存在であったという。また、コナラ林は



秩父神社樹冠投影図

アカマツ林とともに埼玉の暖温帯、秩父盆地を中心とする中間温帯などの代表的落葉広葉樹林だ〔埼玉県史1986〕とも言われているので、後になり、ケヤキ、イチヨウ、スギなどの植林が進んだのではないだろうか。

現在の社叢は、市街地の社叢でケヤキの大径木が優占種の杜になっている。改増築と道路の新設などの都市計画により往時のケヤキ群生地の様相が変化してきている。大径木のケヤキが境内や「柞乃杜」といわれる社叢に多数生育していて、亜高木層低木層にはシラカシ、サンゴジュ、ツバキ、アオキなどの常緑広葉樹が比較的密生している。スギやヒノキの植林と思われるところもあるが神社の努力により改善され、現在はケヤキを中心とした若齢林の段階まで回復している。神木は境内のイチヨウであり、胸高直径150cmはあると思われる。

市街地なのでいろいろな制約があると思えるが、立ち入りが制限されている「柞乃杜」では自然度がよく保てるよう配慮されていると思われる。下草や低木層を整理してしまう例が他所にはあるがここではそれが無いようだ。ケヤキの巨木群も生育はよいと思われるが、境内のケヤキの古木には保全の処置がしてあるが本来の樹型を保持してはいない。今後腐葉土の造成計画もあるので社叢の適切な保育作業が実施されると予想される。

参考文献

埼玉県：新編埼玉県史 別編3 自然 1986／埼玉県立自然史博物館：自然史だより41号 2000／埼玉県神社庁：埼玉の神社 北足立児玉南埼玉 1998 入間北埼玉秩父 1986 大里北葛飾比企 1992／永野巖：埼玉四季の植物(資料編) 埼玉新聞社 1990／牧野富太郎：植物一家言 北隆館 2000

第4回関東定例研究会 報告

2003年2月25日

於：東京農業大学・世田谷キャンパス



鎮守の森と家郷社会 ～日本の集落秩序を考える～

講師：園田 稔(京都大学名誉教授)

家郷社会・風土祭祀・家郷祭祀とは 家郷社会とは、風土や歴史が生まれ育った人のアイデンティティとなっている、ふるさと性のある地域社会のことをいう。社会学でいう地域社会が、今、現に生きている人間しか取り扱わないのとは異なり、家郷社会は「縦の線」である「歴史」を背負い風土を取り込んでいるといえよう。今そこに住んでいる人間にとってのみ便利なコミュニティではなく、まわりの風土に潜む神々そしてまわりの自然を含めた社会が家郷社会なのである。この好例として、安藤広重の長崎湾の名勝図では、稲狭山という当時の神の山の麓に集落を持つという、まわりの風土を取り込んだ景観がみられる。

かつて日本列島は盆地単位に集落が形成され、風土祭祀という体系のもとに成り立っていた。そしてこの集落が氏神をまつり、毎年の祭りを繰り返して家郷性の高い社会をつくりあげ、家郷祭祀を形成した。この祭祀体系は、単なる気候風土ではなく人間の力が及んだ歴史風土であり、歴史が積み重なった精神的な風土である。風土祭祀を背景に、小さな家郷祭祀が営まれているのである。

偶像を持たない日本の神々 西欧や中国、インドなどの多神教がご神体として偶像を持つのに対して、日本も多神教ではあるが偶像を持たない。日本のご神体は霊であり何かに宿る形をとり、常時その姿を見せる訳ではない。むしろ、人間の方が、実体化した神を目にすることを畏れたのである。日本人の思想として尊いものは目に見えず、また目に見えないことこそが重要なのである。だから、神は人間の目に触れにくい「奥」に鎮まるのである。神とは自然の恵みを与えてくれる霊であるので、里からさかのぼ

った豊かな自然の中に宿っているのである。

日本・西欧の町・村の形成 普段は奥・裏に居る神を、祭りの時に、里に迎える。三輪山の例を見ると、集落の外側に鳥居がある。日本の集落は、公共のスペースが中央になく、どこに中心があるのかが分からないのである。日吉神社や飛騨大内などの例で見られるように、街道に沿って集落を持つ。日本の集落は向う三軒両隣と言われるように、道路沿いに広がる、道路を介したコミュニティになっている。その紐状集落が重なって街村をつくる。そして小規模な街村体系は、東京にもまだ残っている。

西欧では、ギリシャの都市国家を例に挙げると、アゴラ(広場)を中心に街が広がる。ドイツ・ロマネスク街道でみられるように、町や村は広場的に集落を持ち、まわりは森で城壁がつけられ、それぞれは隔絶されている。この体系を広場村という。人間が神の使命を受け、神を中心とした人間の社会がコスモスであり、自然からコスモスを受ける日本の社会形成とは異なっている。

奥の思想と鎮守の森 建築家・槇文彦氏によると、「奥」とは見えない中核に向かう空間のベクトルである。その奥に神聖なものが在るという日本人の考え方が、鎮守の森を形成したのである。普段は人間が参道を通して奥の存在に触れるのだが、お祭りとは、何かに宿った神を、年に1、2回お迎えすることなのである。それでも、強い暗示であり、形は見えない。この日本人の神の捉え方は原始的なため明治期から日本学者から錆びれるのでは、と言われつつも続いている。それは、鎮守の森のよさが大きな要因となっているであろう。

この先祖が蓄えてきた価値の高い鎮守の森の文化を遺産として、さらに立派なものにしていきたい。(文責：横山 恵子)

関東支部からの報告

玉川上水の林とその保全について

玉川上水は江戸時代(1653年頃)に、江戸で使う飲料水を確保するために、東京都西部の羽村から四谷大木戸まで掘られた上水道で、現在も水道施設として活用されています。上・中流部の水路沿いには、極めて細い帯状ながら武蔵野の雑木林の面影を残す林が続き、人々の憩いの場となっています。江戸時代には、中流の小金井付近は桜の名所でもありました。在来の自然が残されていることから、生物多様性の保全上も重要で、自然観察の場としても活用されています。関東支部では2020年1月の定例研究会に、この林の保全と調査を多くの市民と一緒に進められている高槻成紀先生をお招きして「玉川上水生き物しらべマップと花マップ」というご講演をお聞きしたところで

ところが9月の末に、これまで在来の自然がよく保全されてきた小平市内の上水沿いの多くの樹木に伐採予定を示す赤テープが巻かれ、危機意識を強くした市民グループから、過度の伐採中止を求める緊急要望書の案が送付されてきました。関東支部の理事や社叢見守り隊の参加者を中心に、急遽、対応を検討し始めましたが、幸いにもその後、過度の伐採は中止され、今回は事なきを得ました。

今回の経緯の詳細は不明ですが、都市域における森や樹木の保全という観点から、社叢の保全をめぐる頻発している状況と、共通点が多いように思います。高槻先生からは、「都市樹木の伐採ということで、社叢学会が何らかの動きをしていただけは非常に意義深いと思います。私たちは住民安全のための必要な伐採は認めています。……無残な伐採痕を見るのは、心の痛むことで、そのことに慣れて何も感じなることは恐ろしいことです。そういう問題も含めて、進行形の都市樹木の伐採を考える、伐採許可の基準を見直すというようなことは非常に重要なことのように思われます」とのコメントも頂きました。

何かの参考になればと思い報告いたします。詳細は下記の、高槻先生のブログと著書をご覧ください。

○ブログ：自然日誌たかつき(特に“助かった樺たち”の記事)

○著書：都会の自然の話を聴く(2017年 彩流社)
(原正利)

事務局から

●今年度の会費未納の方には振替用紙を同封いたしました。何かと多端な折とは存じますが、社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、12月末日までに入金の確認ができない場合は、「鎮守の森だより」等をお送りできなくなりますので、悪しからずご了承下さい。退会をご希望の場合は、会員番号とお名前をご記載の上、Fax・Mailでその旨、お知らせ下さい。

銀行振込も可能です。三菱UFJ銀行 京都支店 普通口座6720345 特定非営利活動法人社叢学会 理事長 藪田稔 です。

●別記の通り、『社叢学研究』19号への、身近な活動報告と社叢を訪れた時の感想などを募集しています。「社叢訪問記」では、今回の災害の被災状況なども含め、どんなことでも結構です。ぜひお寄せください。

編集後記

去年の今頃は、、、ラグビー・ワールドカップに熱中してたなあ。相撲もふつーにやってたしなあ。どちらも密接・密集。こらアカンわ、と半ばあきらめていたけれど、ラグビーも相撲も手探りながら再開。ちょっとうれしい。。

で、オーケストラの演奏会。無観客の映像配信で、指揮者が大きな身振りで振り終えても「しーん」。思わず泣きそうになったよ。聴衆が醸し出す、音楽を聴く喜びが感じられない演奏会はただただ冷たいだけの印象。人間が声だけではなく、様々に発散する熱量はすごいものなんだなあ。コロナさんが教えてくれた。

とはいえコロナさん、おかげで記事がなくて困るじゃないの！ で、アーカイヴシリーズと称して過去の記事を再録。それでも4面は埋まらないよ。白紙のメモ欄でも作るかい？ と思っていると、玉川上水で事件勃発！ よおし！ これでいける！ と思いきや！ 急転直下、良い方向に向かったというニュースが！ ううう、いいんですけどね、その方がもちろん。ともあれ情報提供だけはしておこうではないの。

ふう、何とか4面埋まった。(藤岡 郁)

東日本大震災社叢復興支援事業報告書を発行

8年間の全てを記録 現地調査員の生の声も 頒価 3,000円

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com